

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第122号 会 報 1988年10月25日

目 次

I	第84回総会ならびに講演会	1
II	田中館賞審査報告	2
III	会長コラム	4
IV	運営委員会庶務報告	6
V	JGG編集委員会報告	7
VI	地球電磁気研連委員候補者選挙の結果	7
VII	役員選挙内規改正	8
VIII	第15期学会役員選挙日程および立候補依頼について	9
IX	新入会員等	9
X	田中館賞基金醸金	10
XI	教官公募	10
XII	奨励金等公募	12
XIII	ISRｽ-ﾊ'-ｺﾝﾍﾞ-ﾙCPU時間無償提供公募	12

I 第84回総会ならびに講演会

第84回総会並びに講演会が10月12日～14日金沢大学工学部のお世話で同学部秀峰館並びに講義室を用いて開催された。総会では乙藤洋一郎運営委員を議長に選出の後、満保正喜大会委員長の挨拶があった。ついで木村磐根会長より田中館賞の授与、審査報告がなされた。田中館賞は、渡辺成昭会員、小野高幸会員、西野正徳会員、岩上直幹会員に授与された(本会報Ⅱ項参照)。続いて木村会長の挨拶(本会報Ⅲ項参照)の後、松本紘運営委員から運営委員会報告、庶務報告(本会報Ⅳ項参照)があった。引続き小口高編集

委員長よりJGG編集委員会報告(本会報V項参照)があった。

議事に入り、まず役員選挙内規改正案(本会報VII項参照)の審議が行われ賛成多数で可決された。つぎに1990年Western Pacific Geophysics Meetingへの当学会の財政的協力の限度について100万円を限度とし、学会基金から支出する案が賛成多数で承認された。

次期総会は相模原市に移転した宇宙科学研究所で行われることが西田篤弘会員により確認され、また、次々期開催地として田中義人会員から「神戸大学理学部でお引受け頂けないか」という提案があり、伊勢崎修弘会員から「お引受けする方向で検討する」旨の発言があった。最後は行武毅評議員よりの大会主宰者に対する謝辞が述べられ、無事閉会となった。総会の式次第は以下の通りである。

1. 開会の辞

1. 総会議長指名

1. 大会委員長挨拶

1. 田中館賞授与

1. 田中館賞審査報告

1. 会長挨拶

1. 運営委員会報告

* 地球電磁気研連委員選挙結果

* 役員選挙日程アナウンス

* 1990WPGM国内連絡幹事

* JGG論文賞

* 新入会員等

1. JGG編集委員会報告

1. 議事

(1) 役員選挙内規の改正

(2) 1990 Western Pacific Geophysics Meeting財政負担

(3) 次期・次々期開催地

(4) その他

1. 謝辞

1. 閉会の辞

II 田中館賞審査報告

117号 渡辺成昭会員

[論文名] 上部電離圏における重水素イオン・ホイストラの研究

地球磁気圏には雷放電を源とするホイスラー空電が伝搬しているが、電離層の近くを通る衛星で観測するとイオンの効果が顕著に表れたホイスラー現象が見つけれられる。これらはイオンサイクロトロンホイスラーと呼ばれている。米国ではInjun やISIS衛星によりプロトンおよびヘリウムホイスラーが発見された。渡辺成昭会員はISIS-1,2衛星を用いて中低緯度で重水素ホイスラーを発見した。通常イオンサイクロトロンホイスラーは電波源の真上の電離圏中で観測されるが、渡辺会員の発見したものは赤道を横断した反対半球に波源があるものであり、このような長距離伝搬のメカニズムをレイトレイシングによっても確認した。又この赤道越え重水素ホイスラーの周波数幅は緯度が増す程減少し、磁気緯度 20° 付近より高緯度では存在できないことも理論的に明らかにした。これらの現象とプロトン、ヘリウムホイスラーの発生率の比較により重水素イオンホイスラーは太陽活動極小期に多く、極大期に少ないのに対してプロトンホイスラーの頻度は逆になっている。このことからプロトンの全イオンに対する相対密度の太陽活動度依存性をも示していることが明かにされた。重水素はプロトンなどに比べ大変微量のため直接測定はむづかしいので、このホイスラーによる含有量の推定は貴重な資料となっている。

118号 小野高幸会員

[論文名] 単色光オーロラ画像観測システムを用いたオーロラ現象の研究

オーロラは地球磁気圏の構造やそのダイナミックスの電離層上への投影であり、しかもその光は入射するオーロラ粒子のエネルギーや種類により、種々なスペクトル特性を持つ事は良く知られている。このため単色のオーロラ画像を複数のオーロラ輝線波長にて観測し、これを解析することは極めて重要である。小野会員はオーロラ像を単色光に分離し、CCD素子とイメージ増倍管を用いた高感度の撮像系並びに画像データのデジタル収録システムを開発し、昭和基地でのオーロラ観測に初めて使用した。さらに得られた画像データの処理システムを確立し、多色オーロラ画像の相互比較、人工衛星観測によるオーロラ降下粒子とオーロラとの相互比較等を定量的に行うことを可能とした。その結果オーロラ光のスペクトル強度比が入射するオーロラ電子エネルギースペクトルに呼応して変化していることがEXOS-Cとの同時観測により実証された。又夕方側オーロラオーバルの低緯度に分布するディフューズオーロラの多くがプロトンによって発光するプロトンオーロラであることが示された。これらの研究には単色オーロラ画像がデジタル量として取得されているという長所が最大限に生かされており、定量的議論が出来る点が高く評価されている。

以上が本報告書の要約であり、詳細は本報告書の本文を参照して下さい。

119号 西野 正徳会員

[論文名] 到来方向測定によるオーロラヒスの研究

オーロラの出現に伴い冬季、夕方から真夜中に観測されるオーロラヒスは、その波形が白色雑音に近く、電離層を透過して楕円偏波で地上に到来する微弱なVLF-LF帯の電波である。この電波の電離層の出口の位置を決める到来方向測定法は、従来の方法では偏波に依存し、又白色雑音のため測定精度に問題があった。西野会員は20km離れた3点でのオーロラヒスの到来時間差を相互相関解析によって計測する方法を開発し、実際第19次南極越冬隊隊員としてこの方式の観測を行い精度のよい到来方向測定に成功した。又同君はこの方式による方向測定とオーロラ全天カメラデータとの比較からオーロラ電離層透過特性には2種類あることをみつけた。1つは静かなオーロラに伴われた狭帯域、連続性ヒスで電離層透過出口はオーロラアークより200~300km低緯度にある。2つ目は活動的なオーロラアークに伴われる広帯域・衝撃性ヒスでその出口はオーロラアークの光の強い動きの早い局部域の近辺にあること、これらからこの2つのオーロラヒスの発生機構を考える上での重要なポイントを明らかにした。

120号 岩上直幹会員

[論文名] ロケット観測による熱圏一酸化窒素の研究

超高層大気中の一酸化窒素(NO)は電離圏D領域の光電離やE領域のイオン変換反応に関与する分子で高度分布や時間的空間的变化に関する知識は電離圏生成と構造を研究する上で不可欠であり、赤外放射によって熱圏の放射冷却に影響を及ぼすので、熱圏温度構造研究にとっても重要な成分である。岩上会員はロケット搭載可能な小型、軽量高感度なガンマ帯大気光放射計を開発した。これにより数多くのロケット実験が行われたが、インドで行われた観測は低緯度観測としては初めてのものであり、太陽活動極小期において高度120km付近以高で一酸化窒素密度の日変化が大きいことを示す結果を得ており、理論モデル計算の検証のための重要なデータとなっている。又自ら南極越冬中に行ったロケット実験により、オーロラ粒子によって一酸化窒素が生成されていることを実証し、その構造を明かにした。又内之浦の長期間に亘るロケット実験では太陽活動による変動を定量的に解明し、E領域電子密度およびイオン組成データからの観測が正しかったことを示した。このように同君の成果は熱圏一酸化窒素の高度分布の動態とその物理・化学の解明に大きく貢献した。

III 会長コラム

今回の学会は金沢大学の数少ない会員である満保正喜教授並びに長野勇教授をはじめと

して、同研究室スタッフ、学生諸君による献身的なお世話により、同大学工学部において、行き届いた総会、講演会、ならびに懇親会を催して頂き、学会を代表して厚く御礼申し上げます。今回はポスターセッション49件を含む201件の発表があり、名誉会員の前田憲一先生、太田柁次郎先生をはじめ合計293名（一般会員165名、学生会員50名、非会員72名、賛助会員4名）の方々の参加を得て、研究発表が大変活発に行われました。特に今回ポスターセッションのために3日間利用できる広い会場を準備して頂いたことは大変好評でありました。

また河野長会員、および杉浦正久会員からは大変分かりやすい立派なレビュー講演を頂きましたが、ご多忙にも関わらず、お引受け頂き本当に有難うございました。今までも同様ですが、レビューをして頂くジェネレーションの方々はいずれも最もお忙しい方々であり、それらの方々にあえてお願いしなければならないところがこの企画を続けて行く上で難しいところとなっております。しかしこのレビューは今回も会場に溢れる程の多数の会員の方々がお聴き下さいましたように、この学会講演会中の重要なイベントとなっておりますので、今後共是非長続きするよう宜しくお願い致します。

まず、会員のおめでたいニュースをご紹介致します。名誉会員の永田武先生は7月のSCOSTEPの役員会で、先生の「世界のSTPコミュニティへの大きな貢献」に対してhonorary memberに推挙され表彰状をおもらいになりました。また深尾昌一郎会員は、日本気象学会から「大型レーダーによる高層大気波動の研究」に対して今回から始まった堀内基金奨励賞を受賞されることになりました。ご同慶の至りであります。

次に田中館賞の件であります。今回も優秀な論文の推薦が多数あり、推薦者に評議員会にご出席願って評議員からの厳しい質疑に応じて頂き、十分慎重な審議の結果本会報Ⅱ項に記載のように4会員への授賞が決定致しました。一方では、会員の方々から、このところの授賞件数が多すぎるというご批判があります。評議員会としては、これらのご意見をも踏まえ、今までのように件数を制限しない方式を続けても良いかどうかの議論を致しております。その場合、この賞の持つ性格・意義に立ち戻って議論しなければならず、又制限するとしても何件が適当であるかを決めるについては十分慎重を期する必要がありますので、できるだけ今期に引き続いて評議員会で議論し、結論を出したいと思っております。会員の皆様からのご意見もぜひお聞かせ頂きたいと思っております。

本学会の現役員の任期は次期役員会が発足する来年1月に切れることになっており、新役員の選出がこれからの重要な行事であります。この件に関しては今回の総会でお決め頂いた内規（Ⅶ項参照）に従って選挙を行いますので宜しくお願い致します。

今年の初めに日本学術会議第14期会員候補者、並びに推薦人を投票で決めて頂きました

たが、当学会からの推薦人であられた福島直先生の大変なご尽力にもかかわらず、残念ながら当学会の候補者からは学会議会員は選ばれませんでした。学会の規模は小さいとはいえ、当学会からも学会議会員を出すためには、今後どうすれば良いかを今から模索していく必要があると思われます。

前々回からお知らせ致しておりますAGU提案の1990年に日本で開催予定のWestern Pacific Geophysics Meeting(1990WPGMと便宜的に略称)についてはAGUからはまだ正式になんの連絡もありません。しかし、別ルートの情報では、マイアミ大学海洋のC. Harrison教授が米国側の責任者に選ばれた由であり、日本国内で適地の候補を調査中で、金沢も有力な候補の1つとなっているとのことであります。日本側としても関連学会の代表または幹事が集まって日本側の対応を検討しなければならない段階にきております。地震学会からの提案もあり、運営委員会では福西浩、本蔵義守両運営委員に本学会の代表幹事をお願い致しました。また財政的協力についても、総会で100万円以内の当学会負担をお認め頂いたので、その点を踏まえて今後対応して行きたいと思っております。

さて、当学会の名称が変更されて直後からの役員として選ばれて以来、4回目の総会・講演会を無事済ますことができ、評議員、運営委員の方々と共にほっといたしております。会長としては力不足もあり、今後にまだ沢山の重要問題を残していることは申し訳ないことと思っております。最後に、会長としましては評議員、運営委員の方々と及び会員の皆様の暖かいご協力とご支援をえて何とかここまで務めさせて頂いたことを心から感謝致します。

(木村 啓根)

IV 運営委員会庶務報告

第150回運営委員会が昭和63年10月11日の16時から21時45分まで金沢大学工学部第一会議室で開催された。

第84回総会ならびに講演会に関し長野会員から準備状況について報告があった。マスターセッション専用の会場が三日間にわたり確保され49講演を7行×7列に配置すること、第一会場80名、第二会場105名、第三会場165名収納可能な部屋が確保されていること等が報告された。又地球電磁気研連委員選挙結果が報告された。1990年Western Pacific Geophysics Meeting(1990WPGM)に関し、地震学会からの情報として石川県が1990WPGMを誘致しているとの報告があった。賛助会員数については会長の努力により11口(11社)から32口(18社)に増えたことが報告された。

議事に入り、別項Iに述べられたように第84回総会次第が決定された。今回、新たにJGG編集委員会報告が追加された。review講演座長は福西委員が担当することが決定された。

続いて役員選挙内規の検討に入り、別項で述べられているような役員選挙内規改正(案)が承認され総会に諮ることとなり、次期役員選挙の選挙日程が決定された。また、会長選挙の方法についての検討も行われたが今回の選挙方法改正においては会長選挙方法の改正は行わず、次期運営委員会への申し送り事項とすることが決定された。次いで長谷川杯候補者審議を行い、候補者一人を評議員会へ推薦した。また名誉会員についても議論を行い、名誉会員の懇親会費を無料とすることが決定された。なお新しく一名の会員をご本人のご承諾が得られれば、名誉会員として推挙することとなった。1990WPGMに対する財政負担については、賛助会員も増え、財政的にも余裕ができるので100万円を限度に認めてもらえるよう総会に諮ることとなった。また本学会の代表幹事に福西、本蔵委員を選出した。JGG論文賞(仮称)規約の検討を行い、この論文賞を新設することについては了承された。外国会員会費並びに納入方法については継続審議となった。次期総会及び講演会は宇宙科学研究所で来春の連休明け(5/10-13の内の3日)に行われることが確認された。また次々期総会並びに講演会は神戸大学理学部のお世話で神戸で開催していただく案が了承された。最後に別項IXのように新入会員が承認された。

V JGG編集委員会報告

JGGは最近毎号順調に出版され、早いものでは投稿後6ヶ月で出版されている場合があります。今後も多数の優れた論文が投稿される事を希望します。また前回会報にも紹介しましたように若手研究者を対象にしたJGG論文賞(仮称)を作ることにについて編集委員会の検討結果を運営委員会、評議員会でも検討願っております。来春の総会で会員の皆様にお諮りして、遡って今年の1~12号掲載の論文から賞が出せるようにしたいと考えております。

(編集委員長 小口 高)

VI 地球電磁気研連委員候補者選挙の結果

第120号の会報でお願いしました学術会議第14期地球電磁気・地球惑星圏学会委員候補者の選挙の結果は下記のようにになりました。

開票内訳

- ・返信封筒 98通
- ・投票小封筒 101通
- ・投票総数(101×8) 808票 (有効票773票・白票35票)

委員候補者(8名)

大家 寛 51票

西田篤弘	46票
行武 毅	43票
小口 高	42票
加藤 進	34票
河野 長	30票
杉浦正久	28票
小嶋 稔	24票

次点 安川克己 23票

尚、委員の選出内規に従い本学会会長は自動的に委員候補者となり、委員候補者は合計9名となります。

Ⅶ 役員選挙内規改正

第84回総会で改正が承認された役員選挙内規は下記の通りであります。

第2条 役員選挙は次の通りとする。

1. 会長の選出は単記無記名投票で行なう。ただし最高得票者が2名以上ある場合には最年長者が会長に就任する。
2. 評議員の選出は9名連記無記名投票を行い、得票数の順位に従って上位9名を当選者とする。なお得票同数者がある場合には年長者を当選者とする。
3. 運営委員については下記の様式にしたがい14名連記無記名投票を行い、合計得票数の順位に従って上位14名を選出する。なお得票同数者がある場合には年長者を当選者とする。

主として地球外部物理学を研究するもの	3名
主として地球内部物理学を研究するもの	3名
東北・北海道地区に在住するもの	1名
関東地区に在住するもの	4名
中部地区に在住するもの	1名
関西以西地区に在住するもの	2名

ただし同一人を評議員と運営委員に重複して記載してもさしつかえない。なお、3期連続運営委員経験者は次期の運営委員として選ばれても辞退することができ、通算5期経験者は再任を永久に辞退することができる。これらの氏名は選挙に先立ち全会員に通知する。

4. 正会員は2名以上の他の正会員により推薦された場合、評議員または運営委員に立候補することができる。この場合学会は選挙広報に立候補者の氏名、勤務先、研究分野、推薦者名などを掲載し、投票に際しての参考資料とする。
5. 前項の選出において、もし同一人が2種以上の役員に当選した場合は、本人の意志によりその一つを選ばなければならない。
6. 前項のために定数に欠員が生じたときは、次点者を繰り上げ当選とする。
(アンダーライン；訂正または新規追加)

Ⅷ 第15期学会役員選挙日程および立候補依頼について

第84回総会(63.10.13)において改正された本学会役員選挙内規に基づき、下記日程により第15期役員選挙を施行いたします。内規改正の主旨に則り、本学会のために評議員あるいは運営委員として活躍して下さる方々の立候補を歓迎致します。また活躍頂けそうな正会員が居られましたら立候補されるよう積極的に推薦して頂くことをお願い致します。

正会員2名の推薦によって評議員または運営委員に立候補をされる正会員は、年齢、勤務先、研究分野(20字以内)及び推薦者名を書面にて、11月15日まで(必着)に木村警根会長までお送り下さい。ただし、推薦者の印鑑などは不要です。11月25日頃発行の選挙広報に、投票のご参考になるよう立候補者のこれらの情報を掲載致します。なお正会員は複数の候補者の推薦人になることができます。

記

評議員、運営委員立候補受付：11月15日〆切(宛先は会長)

選挙広報、投票用紙発送：11月25日頃

投票〆切：12月20日(宛先は学会事務センター)

Ⅸ 新入会員等

第150回運営委員会で次の方々の入会が承認されました。

今井 富夫 日立超LSIエンジニアリング(株)

秋吉 俊男 福岡工業大学

鈴木 秀明(*) 東北大学理学部

上田 裕子 学習院大学計算機センター

亘 慎一 通信総合研究所

大橋 功 三菱重工(株)
藤原 健治 気象研究所
升本 眞二 大阪市立大学理学部
高橋 耕三 通信総合研究所
大木 俊夫 東北大学理学部
趙 国澤 State Seismological Bureau (中国)
(現在東大地震研)

坂本 正徳(*) 大阪市立大学理学部
A.L.OROZCO(**) Ciudad 大学(メキシコ)
(*: 学生、**: 外国)

退会者(外国会員)

Kaichi MAEDA**
H. POEVERLEIN**

下記の方は住所不明です。ご存知の方がありましたら学会事務センター迄お知らせ下さい。

Dr. Dean CLAUSER

また10月11日迄に新規に賛助会員になって頂いた機関は下記の通りです。これらの機関のご協力を感謝致します。

三菱電機(株) 中央研究所 (3口)
(株) 東芝 宇宙開発本部 (3口)

この結果名誉会員6名、正会員589名(内学生68名)、外国会員51名、賛助会員18社(32口)となりました。

X 田中館賞基金醸金

会報第120号以降に下記の会員から醸金を頂き、醸金総額662,000円となりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

相京和弘 (敬称略)

XI 教官公募

1. 名古屋大学理学部附属宇宙線望遠鏡研究施設教官公募

公募人員： 教授又は助教授 1名

研究内容： 当研究施設では、現在、名古屋大学空電研究所と共に、太陽地球系物理の総合的研究を行う全国共同利用研究所（大部門制）への改組を目指し、準備を進めています。新研究所が発足すれば、当研究施設（2部門）は太陽圏科学を扱う大部門へ転換されます。今回の公募では太陽圏科学及びその周辺を含む全般の研究について主導的役割を果たす方を希望しています。

着任時期： 昭和64年4月1日

提出書類： ○履歴書 ○研究歴 ○業績・論文リスト及び主要論文別刷
○研究計画書 ○推薦書

選考方法： 名古屋大学空電研究所改組検討委員会の意見を聞き、当研究施設協議会の議を経て、理学部教授会において決定します。尚、適任者のない場合は決定を保留します。

締切期日： 昭和64年1月10日

宛 先： 〒464-01 名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部附属宇宙線望遠鏡研究施設
村上一昭 TEL 052-781-5111 内線2442

2. 名古屋大学空電研究所助教授公募

公募人員： 助教授 3～4名

研究内容： 太陽地球系物理学
空電研究所は理学部附属宇宙線望遠鏡研究施設と共に、太陽地球系物理の総合的研究を行う全国共同利用型の研究所への改組を目指して準備を進めています。改組実現後の研究系は、太陽から磁気圏へのエネルギー輸送過程を研究する「エネルギー輸送」大部門、電離圏から成層圏にわたる領域におけるエネルギー・物質変換過程を研究する「エネルギー・物質変換」大部門、総合資料解析（シミュレーションを含む）による太陽地球系環境を研究する「総合解析」大部門、太陽圏とその周辺の研究を行う「太陽圏科学」大部門及び「太陽地球系総観科学」客員部門とで構成される予定です。当研究所では今回の公募で、「エネルギー輸送」、「エネルギー・物質変換」二大部門における観測的研究及び「総合解析」大部門における資料解析的研究のそれぞれについて推進役を果たす方を希望しています。

着任時期： 決定後できるだけ早い時期。

提出書類： ○履歴書 ○研究歴 ○業績リストおよび主要論文別刷り
○研究計画書 ○推薦書

公募締切： 昭和64年1月10日

候補者の選考方法： 名古屋大学空電研究所改組検討委員会の意見を聞き、空電研究所教授会で決定します。なお、適任者のない場合は決定を保留します。

宛先・問い合わせ先： 〒442 愛知県豊川市穂の原3-13

名古屋大学空電研究所長 柿沼隆清

電話 05338-6-3154

XI 奨励金等公募

1. 山田科学振興財団「1989年度研究援助」：これは当学会が援助候補者を推薦する。推薦締切1989年1月末。推薦希望者は深尾昌一郎運営委員にお問い合わせ下さい。

2. 財団法人国際コミュニケーション基金：昭和63年度助成・援助（後期）締切11月30日（水）。申請手続きについては財団か深尾昌一郎運営委員にお問い合わせ下さい。

尚これら研究助成申請希望者が多数あった場合には評議員会に諮って推薦者数をしぼらせて頂くことがありますのであらかじめご了承下さい。

XII ISRシステム・コンピュータCPU時間無償提供公募

<CPU無償提供制度応募要項>

1. 研究テーマ ISRシステム・コンピュータの利用法に関するテーマであれば、分野は問いません。ただし、独創的なテーマを広く募集致します。
2. 提供内容 昭和64年1月より3月までの間、ISRシステム・コンピュータ研究所所有SX-2AのCPU時間を3名に100時間提供致します。
3. 応募資格 大学院生及びそれに準ずる研究者
または大学、公共機関に従事する研究者
4. 応募締切 昭和63年11月15日（火）必着
5. 発表 昭和63年12月中旬（なお、研究成果は応募者本人に帰属致します。また、交通費等必要となる経費につきましては、一定限度でISRにて補助致します。）
6. 審査委員 相磯秀夫、金田康正、小林敏雄、西原功修、松本 紘、米澤明憲、
ラウル・メンデス

詳しい応募要項等をの送付については直接下記までお問い合わせ下さい。

〒104 東京都中央区勝どき2-11 リクルート勝どきビル スパ-コンピュータ研究所

tel 03-536-9661

CPU 無償提供係 宛

学会役員の名な連絡先

会 長	〒606	京都市左京区吉田本町
木 村 啓 根		京都大学工学部電気工学第二教室
		Tel 075-753-5348 (ダイヤル)
		Tel&FAX 075-751-8201 直通
運営委員会		
庶 務	〒611	宇治市五ヶ庄
松 本 紘		京都大学超高層電波研究センター
		Tel 0774-32-3111 (内線) 3332
		Tel 0774-33-2532 直通
		FAX 0774-31-8463 事務室
同 庶 務		
深 尾 昌一郎		Tel 0774-32-3111 (内線) 3352
		FAX 0774-31-8463 事務室

発行	地球電磁気・地球惑星圏学会
	〒113 東京都文京区弥生2-4-16
	学会事務センタービル
	(財)日本学会事務センター内
電 話	(03) 817-5801
ファックス	(03) 817-5800